



## 札幌部会(第33回)

日 時: 令和6年8月10日(土) 14:00 - 17:00

場 所: キャリアバンクセミナールーム + Zoomを活用したハイブリッド形式

参加者: 会場 25名 Zoom 9名

### 【内容要旨】

#### 1 挨拶: 北海道エアポート(株)社長 蒲生猛氏

- ・今回のプロジェクトに際し、慶応義塾大学の加藤先生をはじめ、北海道庁のバックアップ、そして北海道を選んだことに、感謝申し上げます。
- ・「コロナ」によって、多くの人が空港から離れていってしまった。強い意志を持った若い人をつくっていただきたい。空港の存在を分かって欲しいという願いをもっている。

#### 2 参加者自己紹介 (省略)

#### 3 講演: 「教科書を使った空港教材づくりに必要な生徒や政策～北海道の地域性を考慮して～」

／慶応義塾大学 加藤一誠 教授

- ・今回の企画は、北海道という特性を考え、交通、とくに航空・空港を使った経済教育、そこに、航空が運ぶインバウンド旅客を合わせ、地域教材をつくれぬか、ということが起点となっている。
- ・空港に関する基礎知識として、設置管理者が異なるという空港の種別から説明を始める。
- ・今回のキーワードとなるものは、空港の持ち主に「政府」が入っていることである。(経済分野の授業において) 政府の仕事としての空港がなかなか出てこないという実態がある。ひとつはその視点で考えたらどうなるかという提案でもある。
- ・空港と航空は、よく混同されている。空港では滑走路、着陸帯、誘導路、駐機場を基本施設といい、それらが空港のコア(核)である。アメリカの空港はパブリックなものであるが、日本は戦後の歴史的経緯から、地面や基本施設は国や地方自治体、ビルは民間や第三セクター、主な駐車場は財団法人が運営するという複雑な形態になっている。
- ・空港は外部不経済(騒音)が発生してしまう。騒音公害に対し、近隣住民への対策が必要になるが、その資金をどうするかという問題が生じる。全国の19か所の駐車場を財団法人は運営しているが、その料金収入を全国プール制にし、それを騒音対策の費用にあてている。(外部性の内部化)
- ・北海道でいえば、新千歳空港での騒音対策、主に苫小牧方面になるが、これは自衛隊が対応している。新千歳をみれば、その政策(対応策)も学べると思う。
- ・空港が、なぜ政府の仕事としているかという理由として、教科書の市場の失敗の部分で記載されている「外部不経済」「公共財」「情報の非対称性」「長期の費用逓減」から想像することができる。これらの中で、空港はどれにあたるかということを考えてとき、民間運営と国の運営が混ざっている(混合財)なため、説明が難しくなる。そのため、現在、教科書に挙げられるのは、純粹公共財として警察、消防になる。ただ、我々の常識として空港は公共財という概念をもっているため、政府の仕事として授業で活用してみてもどうか、という提案である。また、航空路は「領空」という概念から、歴



史的分野における近代国家の単元でも活用することができる。

- ・インバウンド旅客を誘致するために、各空港の地元自治体は、外国航空会社や旅行会社に対して補助金をだして誘致している。自治体が相対で交渉することで囚人ジレンマが起きてしまい、それを打破するための方策として、たとえば、地域の中立的な経済団体が同席するなりして協調すれば、無駄な補助金（税金）をかけなくても済むのではないかと、このように思っている。誘致の目的は地域のメリットだから、別の考え方もできる。
- ・教科書の知識やネタで、空港という現実の課題を解いてみる教材を考えてみてはどうかと思っている。
- ・たとえば、空港の仕事があるよ、という紹介で終わるのではなく、その仕事はどのような意味をもっているかを教え、生徒たちへの気づきを引き出してほしいと思っている。

#### 4 説明：「空港と教育のコラボ事業」 研究会の立ち上げ、事業概要並びに事業計画

／北翔大学 川瀬 雅之 教授

- ・このプロジェクト目的は以下の4点。
  - (1) 北海道における雇用基盤としての航空・空港の役割を、教育現場に認識してもらうため、中学・高校の教員を招いて、研究会（セミナー、シンポジウム等）を開催する。
  - (2) 公民・政治経済を担当する教員や進路・就職指導担当の教員に参加してもらうことを主眼とする。その中で、空港の役割について授業を通して生徒に考える機会としたい。
  - (3) 高卒生や大卒生に、地元で働いてもらうような環境を整備することは、労働者不足に直面する航空・空港業界だけでなく、地域経済にも寄与するものと考えます。
  - (4) 空港の現場を理解してもらうため、空港の視察を企画する。
- ・社会のものの見方、考え方を踏まえ、「空港」という素材で、教材の開発を展開していきたい。

#### 5 説明：「北海道エアポートの道内7空港 運営事業」

／北海道エアポート(株)総合企画本部 経営企画課長 武山 直弘 氏

- ・道内空港ネットワークを強化していくことが使命である。また、利用者にとって、より便利に空港を使ってもらえるようにすることが目指すところ。したがって、運営している7つの空港だけでなく、道内のことを考えて活動している会社である。道内外を結んでいる輸送分担率は、船舶が7%、JRが6%、それ以外がすべて航空である。道内にとって、これだけ重要な交通機関の中心となっている機関の運営を担っているという事実がある。
- ・主な事業に不動産賃貸業がある。具体的に示すと、空港ビルに関わるもの、貨物に関わるもの、飛行機の燃料に関わるパイプライン、駐車場の運営、滑走路の維持管理、航空灯の維持管理、航空運行状況業務がある。また、営業としてエアラインの誘致活動、観光需要を掘り起こすPR活動がある。グランドハンドリングは、別の会社が担っているため、直接北海道エアポートが運営しているものではない。
- ・経営戦略として、新千歳空港を核にして、より多くの外国の方々に来ていただき、他の6空港へ送客していく。そして空港を整備していくことを国へ説明した。
- ・現在の課題は、空港人材の不足。受け入れ態勢が整わないと、エアラインの受け入れが難しくなり、結果として、地域が受けられる利益がなくなってしまう。そのために、短期的な取り組みとして空港を知ってもらえる活動や就職セミナーを行っている。他方、人口の減少や労働人材の枯渇が見えている



中、中長期的な取り組みとして、教育（教員）との勉強会を考え、今回のプロジェクトに参加した。空港は魅力ある職場である。それを若い世代に知ってもらいたい。

## 6 空港・航空を使った教材と指導方法について

### (1) 下川欣哉氏（札幌国際情報高等学校）より

- ・「空港の仕事を知る」という部分から、試案という形で作成した。評価については、文部科学省から示されている「ICEモデルを基軸として、全校的な探求型授業の展開を推進」より、ICEルーブリック評価表を作成した。なお、これは教師からの評価だけでなく、生徒相互評価も視野に入れている。
- ・授業の流れとして、まず国土交通省、北海道開発局の公式資料から、空港の利用状況を調べ分析する。その後、道内の空港を一つ取り上げ、その空港の特徴についてまとめる。そして、その空港の課題を考え、解決策を示す形である。

### (2) 加藤伸城氏（中標津高等学校）より

- ・ワークシートという形式で、およそ一単位時間で授業をすることを想定している。また、この授業は地理総合、公共でも活用できるだろうと考えている。
- ・空港や飛行機にそれほど興味をもっていないが、自分の興味ある分野が、空港を通じて何か解決できるということが気づけると、面白くなるのではないかと考えている。それを踏まえ、イメージマップを作成し、空港にどのような機能があり、どのように課題解決していくのか、そしてその解決する上での自分のアイデアとそれを実行するために必要なことを考えていく形の授業である。

### (3) 元紺谷尊広氏（北海学園大学）より

- ・公共の大項目Cに準えて「空港を地域資源とした持続可能な地域づくりを目指して」という単元の計画案を作成した。
- ・内容は、道内にある空港の特色や課題についての情報を収集、整理、考察をする。それをふまえ、問いを自ら設定し、解決に向けた見通しを立てる。その後、その見通しについて提言案としてまとめ、最終的に発表し、提言を修正しながら完成をさせるというものである。なお、これは国立教育政策研究所から出された「指導と評価の一体化」の中で示されたものを参考にしてしている。

## 7 質疑等

- ・下川先生の発表について。今回提示されたICEルーブリック評価は、今回の教材に関わって、調べた内容について、生徒同士が相互評価するのに使い勝手が良いのではと考え、当てはめてみたものである。
- ・加藤先生の発表について。イメージマップについて、空港が多機能であるというところに重きを置いている。目の前にいる生徒へ、実際に授業を行うと相当困るのではないかと（矢印が引けない、もしくは一本程度で鉛筆が止まってしまう）。その意味で、自分の中から、何か別の視点で（空港とつながるなにかを）書き出すことが、空港の多機能という部分に着目してほしいと思っている。
- ・中学校の立場から、そもそもなぜ空港を取り上げる必要があるのかを、どう生徒たちに伝え、共有していくのかという疑問をもった。それに対し、身近なドラマを切り口に、そこから考えていくという方法もある、という意見がだされた。また、JR北海道の路線が廃止されていく中で、航空・空港は重要な選択肢になる。そして、そもそも、移動することの本質が何であるか（おそらくは、自分の満足度を高めるためであろう）を考えていくことという回答が、会場から示された。また、空港は北海



道において大きな意味をもっていることを、東京からの時間距離のグラフを踏まえて伝えることで、視野が広がり、身近なものになるのではないかと考えていると回答があった。

○同志社大学 野間敏克教授より

・空港は公民的分野の政治、経済、国際、どれとでも絡めることができる幅広い題材として使えることができるという利点がある。と同時にそれが欠点にもなる。また、効率と公正、対立と合意がはっきりと出てくるので、生徒たちに考えさせやすい。地域社会とのかかわりが密接であり、それゆえ調査をして、現場の人たちと交流し、専門家の方から聞くという探求的な学習が進めやすいと感じている。他方で、話が散らばりやすい短所がある。

・3人の先生方が作成した教材についてコメントをする。（詳細は省略）

○蒲生社長が感想として、以下のようなコメントを述べられた。空港は最新技術の集積しているところであり、企業と共同研究し、それを実際に使おうとしている。たとえば、除雪は労働集約的な仕事だが、人不足のおり、技術で代替できないか、という現実がある。そのようなところを見て、考えて頂ければと思う。

（文責：竹内 大輔）

次回開催予定：

議題